

『サムスクチェンモ』における道次第

青 原 彰 子

0. クンケン・ジャムヤンシェーパ I 世ガワン・ツォンドゥー (kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus, 1648–1721) 著『サムスクチェンモ』(bSam gzugs chen mo, SZCM) は、ゲルグ派デプン寺ゴマン学堂の僧院教科書である。僧院教育は問答と講義によって成り立っており、講義に用いられる教科書は問答を記述するという著述方法を取っている¹⁾。現在もこのような教科書によって教育が行われている。『サムスクチェンモ』「止観の章」は、ツォンカパの『ラムリムチェンモ』(Lam rim chen mo, LRCM)「止住の章」の主要な部分を問答の形式によって記述している。青原 [2011b] が明らかにしたように、「止住」(zhi gnas) と「勝観」(lhag mthong) にはそれぞれ二種あり、「止住」は第一義的には軽安 (shin sbyangs) を得た等持(三昧) (ting ge 'dzin), 第二義的には軽安を得る以前の段階の九種心住 (sems gnas dgu) を指示し、一方「勝観」は第一義的には軽安を得た等持(三昧)の後段階における伺察, 第二義的にはその前段階の伺察修 (dpyod sgom) を指示する。この二種の止住と勝観は LRCM が止観の修習次第に関する議論において導入したものであり、SZCM もまた LRCM に従い、このような二種の止住と勝観に立脚して問答を展開する。本稿は、SZCM の止観の修習次第に関する問答を取り上げ、同問答の狙いを明らかにすることを目的とする。

1. 先ずもって LRCM が二種の止観を導入する文脈を確認しておこう。LRCM は「順序が決定している仕方」のなかで次のように主張する。

先に止住を成就してから、それから、それ〔止住〕に依って勝観を修習するのである。(LRCM289b4 (Toh5392 Pa312a4))

LRCM はこの「止住→勝観」の主張が『阿毘達磨集論』の所説と矛盾するように見えることを指摘する。

しかし、『阿毘達磨集論』に「あるものは勝観を得たが、止住を得ていない。彼は、勝観に依拠して止住に精進する」と説かれているのは何故かというならば、(LRCM291a3 (Toh5392 Pa313b5–6))

LRCMはこの矛盾をまさに二種の止観の導入によって解決しようとする。LRCMによれば、「勝観→止住」は、「勝観」と「止住」がともに第一義的なものである場合も第二義的なものである場合も成立する。前者の場合は、SZCMの説明3.5で明らかとなるように第一静慮以上の止観修習の特殊な場合であり、後者の場合はSZCMの説明3.2に該当する。

2. SZCMはLRCMと違って『阿毘達磨集論』が論ずる止観の修習次第のすべての可能性を提示する。

【対論者】[主張] 止観を新規に成就する修習の順序に決りはない。(SZCM51b6 (G68.7-8))

[証因] 『阿毘達磨集論』²⁾に次のように説かれている。

- (1) あるものは止住を得たが、勝観を得ていない。
- (2) あるものは勝観を得たが、止住を得ていない。
- (3) あるものは止住を得ていないし、勝観も得ていない。
- (4) あるものは止住も勝観も得ている。(SZCM51b6-52a1 (G68.7-10))

対論者は『集論』を教証として、止観には多様なあり方があるから、「修習の順序には決りはない」と主張している。

3. SZCMは、『阿毘達磨集論』が想定する(1)～(4)の可能性を、二種の止観を導入して次のように整理する。第一義的な止住と勝観をそれぞれ「(正)止住」「(正)勝観」、第二義的な止住と勝観をそれぞれ「(随)止住」「(随)勝観」と表記して、修習の順序を→で表す。解説順に提示すれば以下のとおりである。

- (1)a (随)止住→(随)勝観 (1)b (正)止住→(正)勝観
- (2)a (随)勝観→(随)止住 (2)b (正)勝観→(正)止住
- (3)a (随)勝観→(随)止住 [* (3)b - 止住・勝観] [* (4) + 止住・勝観]

(4)は、すでに止住も勝観も獲得し終わった状態であるから、修習次第には関係がないので触れられていない。(3)bは、正規の止住も正規の勝観も得ていない場合で、修習次第としては(1)bと(2)bの両方の可能性があり、その両者とまったく同じ状態になるので触れられていない。それに対して(3)aはまったくの初学者の修習過程を想定したもので、詳細な問答がなされる。問答記述は冗長であるので、解説の中心となっている証因のみを提示する。

3.1. (1)a (随)止住→(随)勝観の場合

その主旨のジナプトラの『[集論]註釈』³⁾に、「それ〔四つの止観のあり方〕において一番目は、止住を得ているので、座しながら、心を安住させ〔乃至〕等至〔を修して〕、また、勝観を得ていないので、その等持(三昧)に依って後でそのように座して、法それ

(52) 『サムスクチェンモ』における道次第（青 原）

らを思忖し〔乃至〕周遍伺察を〔修した〕」と説かれているからである。（SZCM52b1-2（G69.1-6））

この『〔集論〕註釈』の記述は、九種心住を（随）止住とみなし、四種作意を（随）勝観とみなしている。（随）止住→（随）勝観の場合は、実際には、九種心住→四種作意と修習する。

3.2. (2)a (随)勝観→(随)止住の場合

前に九種心住の安住修のいずれも得ていなくて、如実と如量に関する伺察修をしたという、改心の経験を得たことを「勝観を得た」としてから、それによって、再び、止住を得るために、〔九種〕心住を育てることを、「勝観に依って止住を成就した」と言説しているから。（SZCM52b6-53a2（G69.14-17））

分別が大の分の者でなくて、煩惱が大の分の人（ブドガラ）は〔その煩惱を〕浄治〔浄惑〕するために、先にその〔瞋などの〕煩惱の対治である慈などに関して伺察修の経験をしてから、煩惱を断じて、それから安住修に入ることがある。〔中略〕『菩提道次第論』⁴⁾に、「無常と輪廻の過患と菩提心の修治においても、改心の経験が生じることが止住に依っているというひどい誤謬になるだろう」と説かれたから。（SZCM54a2-5（G71.4-10））

慈を所縁とする伺察修や、無常、輪廻の過患、菩提心を所縁とする修習も、（随）勝観とみなされている。（随）勝観→（随）止住の場合は、実際には、無常・菩提心等の伺察修→九種心住と修習する。

3.3. (3)a (随)勝観→(随)止住の場合

したがって、再度〔説明するなら、〕根本より聞という点から伺察修あるいは勝観に精進する。それ〔聞〕を先行させてから、九種心住の止住に精進するという意味であるから。（SZCM53a5-6（G70.4-5））

（随）止住も（随）勝観も得ていない状態とは、凡夫がはじめて仏教に出会った状態であり、この状態においては先ず聞が必要である。したがって、（随）止住→（随）勝観ということはあり得ない。「（随）勝観」は聞を指し、「（随）止住」は九種心住を指す。すなわち、この場合の修習は聞→九種心住である。聞に「根本より」という限定が付されている。このことから、道に入る以前の聞が意図されている。

(2)a (3)a の（随）勝観→（随）止住の場合、思忖などの四種作意だけでなく、聞や、慈を所縁とする伺察修や、無常、輪廻の過患、菩提心などの修習も（随）勝観とみなされている。これら（随）勝観の道次第上での位置を確認するならば、如量如実と菩提心は「大士の道の次第」に、輪廻の過患は「中士の道の次第」、無常は「小士の道の次第」、根本からの聞は「道以前の基礎」にそれぞれ位置づけら

れる。問答は、「大士」から「道以前の基礎」へと(随)勝観の範囲を拡大している。

このように(随)勝観を道次第上に位置づけうるのは、LRCMが道次第の各項目について安住修と伺察修を適宜行うべきであると主張するからである。たとえばLRCMは「道以前の基礎・善知識への親近」において次のように述べている。

善知識に対する信を修習することと、有暇具足は利益が大きく得難いことと、死・無常と、業果と、輪廻の過患と、菩提心を修習することなどには伺察修が必要である。(LRCM43b4-5 (Toh5392 Pa49a2-3))

何度伺察しても、心住が生じることはあり得ないので、その〔場合〕には、安住修をなすことが必要である。(LRCM44a3 (Toh5392 Pa49a6-49b1))

SZCMはLRCMが道次第の各部分に説く安住修と伺察修を第二義的な止住と勝観とみなし、このように、問答の展開のなかで、(随)勝観の指示範囲を道次第全体に広げることによって、道次第を止観の観点から俯瞰している。

3.4. (1)b (正)止住→(正)勝観の場合

第一静慮の近分から第一〔静慮〕地に含まれた止住を得て、勝観を得ていないので、了相作意⁵⁾を修習する人がいるから。(SZCM55b2-3 (G73.2-4))

第一静慮の近分未至から、軽安を得てすなわち(正)止住を得てから、(正)勝観を修習する。これこそが、LRCMが説くところの止観の修習の順序である。

3.5. (2)b (正)勝観→(正)止住の場合

『本地分』⁶⁾に、「さらにまた苦〔諦〕から道〔諦〕までも、正しく如実に知ったが、第一静慮などを得ていない。彼は、座った直後に心を安住させて、法を思忖しない。彼は、まさにその増上慧に依ってから増上心を加行する」と説かれているから。(SZCM55b4-6 (G73.7-11)) (LRCM291a5-6 (Toh5392 Pa314a1-2))

LRCMは『本地分』の所説を次のように説明している。

彼は、第一静慮の近分によって含まれた止住を得ていないのではなく、第一静慮の根本定以上の止住を得ていない。それもまた四諦を現前に証得してから、それに依ってから、第一静慮以上の止住を成就する。(LRCM291a4-5 (Toh5392 Pa313b6-314a1))

SZCMはこれを次のように解説している。

その教の意味は、一度に〔三界の九種の〕煩惱を断ずる者のように、近分の勝観に依って、殊勝なる止住というなんらかの根本定を得たということであり、(SZCM55b6-56a1 (G73.11-12))

この『本地分』が想定する修習は、外道で(正)止住を獲得して仏教に転向して、三界九種の煩惱を一度に断ずる預流果以上の聖者の修習である。当該の仏教転向

(54) 『サムスクチェンモ』における道次第 (青 原)

者はすでに輕安を得ているわけであるから、仏教の四諦十六行相などを伺察すなわち勝觀したとしても、それは第一義的な正規のものであり、そのあとに再度等至に入ったならば正規の止住を得ることになる。『本地分』が想定する修習は一般的なものではない。しかし重要なのは、この特殊な修習においては(正)勝觀に先行して(正)止住が成立しているとされる点である。LRCM も SZCM も第一義的な修習次第を止住→勝觀とするが故に、このような『本地分』解釈が可能となっている。

4. 以上『阿毘達磨集論』が提示する止觀の修習次第の有り様を出発点とする、LRCM の二種の止觀に基づく SZCM の問答を検討した。この問答は、最初に対論者が「止觀を新規に成就する修習」と言っているように、新規に止觀を獲得するまでの次第を説示したものである。第一義的な正規の止觀を獲得してから仏位を得るまでは説かれていない。まったくの初学者から第一義的な正規の止觀の獲得までを道次第にあてはめて俯瞰している。LRCM は、止觀の功德が修習の功德すべてを包摂すると説いているが、SZCM は道次第全体を二種の止觀によって俯瞰するとともに、第一義的な正規の止觀の修習をそこに位置づけている。SZCM が道次第の全体を止觀修習の観点から俯瞰しつつ、生徒達に仏教の修道の体系をその各段階を有機的に結びつけながら教示しようとする意図が明白に読み取れるであろう。

-
- 1) SZCM の問答記述については青原 [2011a] に詳説した。 2) D4049 Ri99a6-b1; AS75.19-24; T1605.31.685b11-18. 3) D4053 Li66a4-5; 該当する『雜集論』: D4054 Li229a2-3; ASBh91.5-7; T1606.31.741c11-12. 4) LRCM290a2-3 (Toh5392 Pa312b3). 5) 了相作意は、未至定七作意の一つであり、第一義的な勝觀に他ならない。 6) D4035 Tshi156a7-b1; T1579.30.343a25-27.

〈略号および使用テキスト・参考文献〉

SZCM 『サムスクチェンモ』タシキル版全集 na, ゴマン学堂版。 LRCM 『ラムリムチェンモ』タシルンポ版 pa, 東北蔵外 no. 5392. AS 『阿毘達磨集論』 Pradhan, ed. *Abhidharma Samuccaya of Asaṅga*. Santiniketan: 1950; D no. 4049. ASBh 『阿毘達磨雜集論』 Tatia, ed. *Abhidharmasamuccaya-Bhāṣyam*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976; D no. 4053. 青原彰子 2011a 「『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』における問答記述」『比較論理学研究』8: 255-262; 2011b 「『サムスクチェンモ』における九住心」『印度學佛教學研究』60(1): 505-502.

〈キーワード〉 『サムスクチェンモ』, 止觀, 道次第

(広島大学大学院)